

親子づれでの 前坂キャンプ場昆虫学習会

坪 田 義 正

昨年は清流のせらぎの音を枕に一光小学校を借りての夜間昆虫学習会であったが、今回は趣きを変えて和泉村の前坂キャンプ場で自炊を伴った学習会、自然界に文字通り飛び込んでの昆虫会を実施する。

前坂は岐阜県に近くウグイスの鳴く声を友として大自然に帰る土地柄であり、離村のため全く近隣に人里を見ず、石徹白川の澄みきった冷水、公害とは無関係の緑の山々に囲まれた環境である。親子60余名の一行は今夜の昆虫群への期待とキャンプでの不安を胸に抱いて8月8日昼過ぎの12時20分福井駅発九頭竜湖駅着が14時過ぎ、直ちにバスに乗りかえてキャンプ場着る時、しかし、館長と私は一行に先立ち設営と会場準備のため、市の公用車を駆使して乗り込む。自然の織りなす四囲の風景は交通地獄、騒音公害の中に生きている私達には大自然の母のふところにもたれている安心感が心に湧き出る。

自動車の排気ガスに集中するウシアブの群れ、こんなところにも生態の面白さがうかがわれる。12のだいたい色のテント張り、無経験の母子の設営の戦いが開始され、まがりなりにカラマツ林に急ごしらえの博物館村ができあがる。雨が降ったらどうなるだろう。カヤアブはやってこないだろうか。山添えの夜の寒さはいろいろの不安やもの珍しさがお母さん方の胸中を走る。テント張りが終わって夕飯の仕度、親と子の対話、協力、創意がいやが上にも各所に見出され、情報化時代、親子断絶の時代の文字はそこでは全く不必要語であり、学習の広義の価値も高く評価できる。

文明社会にひた切り切っていた現代人にとってブロックを並べただけのかまどに飯盒炊さん。おおきな薪に引火せず煙に咽びながら根気よく成し得た喜びは、家庭で味わえない成功感でもあり、また美味であったに違いない。

静かな森でカツコウが鳴き始めて夜の昆虫の学習が始まる。白布をバックに誘蛾灯が三基各面にむけられて闇に浮かぶ。月齢8、つごうよく月は雲にかくれ無風状態、やがて何千何万のハアリが白布一面をおおう。時々カプトムシ、アカアシクワガタ、コクワガタ、ベニシタバ、オオミズアオの珍客が親子の歓声に迎えられてやってくる。趨光性と昆虫、飛行時刻と昆虫等生態について説明応答が事実を前にしておこなわれる。

お母さん方の生活経験になかった今日の学習会。子どもよりもむしろ熱心で10時までの予定が12時過ぎてもまだ延々として続く。

さすがは奥越の深山、毛布一枚では冷えびえとしてうすら寒い。肌にしみるシートの冷たさも昼の疲れで熟睡する。マイホームでは想像することもできない就寝状態である。

さて、これからが私達博物館関係者の広域活動時間である。参加の子ども達の期待をより満足させ、昆虫の領域だけでなく理科的自然環境により視野を向けさせ、疑問をいだけさせるための甲虫類の採集である。現代の子ども達の飼育熱は甲虫類に対して驚異の事柄であり、その意欲を満足させるための一手段としての採集配布である。

午前1時過ぎの山々を発電所の灯火を求めて四方に走る。アカアシクワガタ、カブトムシ、チビクワガタ、コクワガタ、ヒメクワガタ、ノコギリクワガタ、ミヤマクワガタ、アゲハモドキ、オナガミヅアオ、エゾゼミなぞる時過ぎまで100個体目標に集める。

2日目の朝は快いさわやかさ、炊事当番以外の人達は朝露の中で植物採集会、採集し廻った後の味噌じるとつけものだけの朝ご飯もかって味わえないおいしさで舌鼓の音があちこちで聞かれる。

食後の予定はキャンプ場の清掃と岩石学習。遠くでウグイスが鳴か、新鮮な空気にいっそうのさわやかさを覚える。

河岸での岩石観察、岩盤の生成、岩石の種類、色流れと形など学習する。今年は例年にない日照り続きのため、石徹白川の水量も少なかったが、底まで透き通った淵で水泳を楽しむ親子の姿も見られる。

日の高まりにつれてキアゲハの容姿が目につく、午前の最後の学習として、採集品の展翅の仕方、保存と活用の方法意義について実習応答の会をもつ。子ども達の目には宝物を見ている輝きが窺われ、本年度の昆虫学習会の成功が推察できる。

立つ鳥跡を濁さず、キャンプ場のエチケットはしっかり守ろうと紙屑は勿論、枯木の始末をして帰途に着く。親子ともども無事故で有意義に終了した喜びは炎暑、酷熱ものかわ、またひとしおである。